

北関東における春まき葉ネギの品種とは種期

松田照男・猪崎政敏・菊池勝一*

緒 言

ネギの原産地は中国の西部であり、漢民族が原始時代より栽培してきたといわれている。わが国でも古書(本草和名; 918年)に「ひともし」の名で出ており、かなり古くからの蔬菜であることが知られている²⁾。

現在もネギは日本人の食生活に不可欠の蔬菜である。主にめん類の薬味として使われており、鍋物の材料としても大切なものであり、そのほか汁の実や和えものなど利用法は広範にわたっている。ネギはビタミンAやCを多く含むばかりでなく、胃液の分泌を良くし、発汗を盛んにする作用があるといわれている。

北海道から九州まで広く栽培されており、各地に定着した品種がある。その分布をみると、冬季に生長を停止し、地上部が枯死して休眠する夏ネギ型の‘加賀’系が寒地に分布し、冬季に発育を続け休眠しない冬ネギ型の‘九条’系が暖地に定着し、中間型の‘千住’系が関東や中部地方に分布している。‘千住’系や‘加賀’系は土寄せをして葉しょう部を軟白する深ネギであり、‘九条’系は緑色の葉身部を主に利用する、いわゆる葉ネギである⁶⁾。それぞれの品種はそれぞれの地方の人々に好まれ、長年利用されてきた。ところが最近消費傾向に異変が起っており、深ネギ地帯の関東地方でも葉ネギの消費がかなり増加しつつある。実際、大量の葉ネギが「万能ネギ」、「武威ネギ」、「青ネギ」等の商品名で、九州・四国方面より東京市場に毎日空輸されているという。

筆者らは品種生態的には暖地に適するとされている‘九条’系葉ネギを、この北関東の地で実用栽培することに成功すれば、輸送費がかからず、より鮮度の高い品物

を東京市場に供給できると考えて本研究に取組んだ、まず春の露地直まき栽培における品種とは種期についての検討を行った。

本研究の遂行に当たり協力された、零田幸和、佐藤千秋、岡本一彦の各学生諸君に感謝の意を表する。

材料および方法

試験Ⅰ (品種比較)

供試品種は‘九条太’、‘九条細’、‘奴’そして‘岩槻’の4品種である。試験区は1区2.5㎡で2条まきとし3反復した。は種量は1㎡当たり4mlで1981年3月23日には種した。各区1㎡当りに腐葉土1000g、苦土石灰100gと、元肥として窒素8g、りん酸12.8g、カリ9.6gを施用した。使用した肥料はフミロン化成(10-16-12)である。調査は5月23日、6月23日、7月23日に行った。調査項目は生葉数、草たけ、葉しょう下部の太さ、分けつ数、生体重である。

試験Ⅱ (は種期の検討一)

供試品種は‘九条細’である。は種期は1982年3月15日、4月15日、5月15日、6月15日の4回とした。試験区の設定やは種量その他耕種方法は試験Ⅰとほぼ同様である。ただしは種期が異なるので各区ともは種10日前に元肥等を入れて準備をした。また期間が長いので追肥として7月1日に全区1㎡当りに窒素3g、カリ3gを施用した。用いた肥料は硫安と硫酸カリである。調査は4月20日、5月10、30日、6月20日、7月10、30日、8月20日、9月10日の8回行った。調査項目は試験Ⅰと同様である。

試験Ⅲ (は種期の検討二)

供試品種は‘九条細’である。は種期を早期に限定し、1981年2月21日、3月7日、3月23日、4月7日の

* 現在茨城県真壁農業改良普及所

4回とした。試験区の設定や試験方法等は試験Ⅱとほぼ同様である。

結 果

試験Ⅰ (品種比較)

Table 1 に各品種の生育状況を示した。草たけは5月23日には‘九条細’が収穫できる程度になったが、

‘奴’はまだ小さかった。6月23日にはいずれの品種も大差なく、38~40cmとなった。7月23日には‘岩槻’次いで‘九条太’が大となり、‘奴’がやはり小さかった。生葉数は5月23日には‘九条細’がやや多く、6月23日には‘奴’及び‘九条細’が、そして7月23日には‘岩槻’が多かった。葉しょう下部の太さにはほとんど品種間差がみられなかったが、6月23日には‘奴’

Table 1 Growth of each variety of Welsh onion at each time of investigation*

Time of investigation	Variety	Plant length	Number of leaves	Diameter of low part of leaf sheath	Number of tillers	Fresh weight
May 23	Kujo-futo	18.2 abc ^{cm}	2.4 b	— mm	0	0.5 NS ^g
	Kujo-hoso	20.7 a	2.7 a	—	0	0.6
	Yacko	16.4 c	2.4 b	—	0	0.5
	Iwatsuki	19.3 ab	2.5 ab	—	0	0.7
June 23	Kujo-futo	38.1 NS	3.4 bc	6.1 NS	0	7.7
	Kujo-hoso	38.6	3.9 ab	6.2	0	7.4
	Yacko	39.3	4.3 a	7.0	0	10.6
	Iwatsuki	40.4	3.2 c	5.4	0	6.3
July 23	Kujo-futo	52.6 ab	2.7 NS	7.4 NS	0.1 NS	17.4 NS
	Kujo-hoso	48.4 bc	3.1	8.1	0.3	21.7
	Yacko	42.8 c	2.6	7.2	0.3	13.5
	Iwatsuki	55.6 a	3.5	8.1	0.5	18.6

* Sowing time is March 23, 1981.

Mean separation in columns by Duncan's multiple range test ($p < 0.05$).

が、7月23日には‘九条細’及び‘岩槻’がやや大であった。いずれの品種も7月23日の調査で分けつが認められ、‘岩槻’が最も多く、‘九条太’は少なかった。生体重に明らかな品種間差はみられなかったが、5月23日には‘岩槻’が、6月23日には‘奴’が、そして7月23日には‘九条細’が他の品種よりやや大であった。‘奴’にさび病の発生が多い傾向がみられた。

試験Ⅱ (は種期の検討一)

は種期別の草たけと生体重の推移をFig. 1に示した。草たけは3月15日は種区が調査期間中、常に最も大であった。4月15日は種区の草たけの伸長速度が最も速

い傾向が見られ、3月15日は種区の草たけにかなり接近した。5月15日は種区では前2者より伸長速度がかなり遅くなった。6月15日は種区は更に伸長が劣り、他区に追い付かないうちに生長が停滞しはじめた。生体重は草たけとほぼ同様の傾向で、6月15日は種区の生育停滞が特に著しかった。

Fig. 2には種期別の葉数、葉しょう下部の太さ及び分けつ数の推移を示した。葉数についてみると、3月15日は種区は5月10日~7月30日の間、2.5~3.0枚であった。4月15日は種区は5月30日には3月15日は種区にほぼ追い付き、これと同様の推移を示した。8月

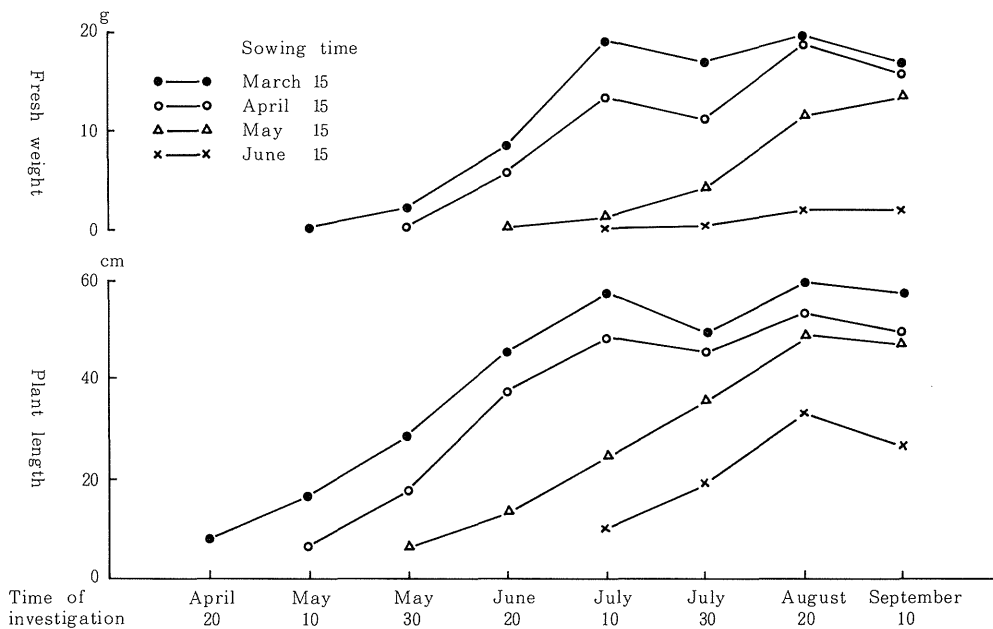


Fig.1 Transition of plant length and fresh weight of each sowing time (Test II)

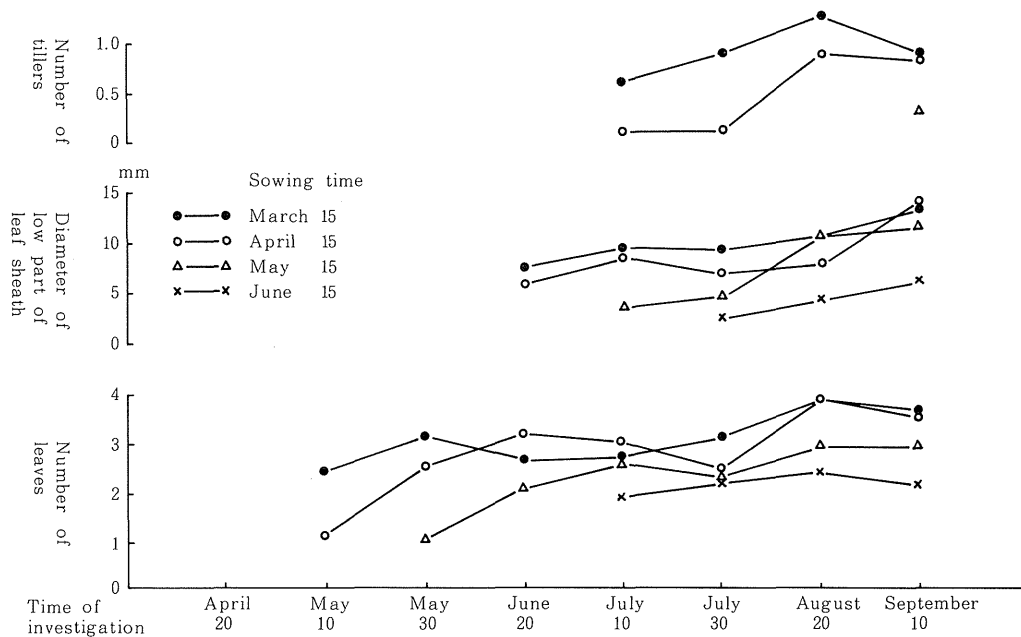


Fig.2 Number of leaves, diameter of low part of leaf sheath and number of tillers of each sowing time (Test II)

20日～9月10日の間は、3月15日、4月15日は種区とも3.5～3.8枚であった。5月15日は種区は6月20

日～9月10日の間2～3枚で、3月15日、4月15日、は種区に追い付かなかった。6月15日は種区は7月10日～9月10日の間2枚前後で推移し、他区に追い付かなかった。

葉しょう下部の太さをみると、3月15日、4月15日は種区は6月20日～9月10日の間、5～14mmで、5月15日は種区が7月30日によくこれに追い付いた。6月15日は種区は8月20日によく他区に追い付き約5mmとなった。

分けつは3月15日、4月15日は種区で7月10日より認められた。5月15日は種区では9月10日によく分けつ数が0.3本となった。3月15日は種区で分けつが多く、7月10日に0.6本、8月20日に1.3本となった。9月10日時点で3月15日、4月15日は種区とも約0.9本であった。

さび病の発生が早いのは種期の区に多い傾向がみられた。

試験Ⅲ (は種期の検討二)

Fig. 3には種期別の草たけの推移を示した。草たけ

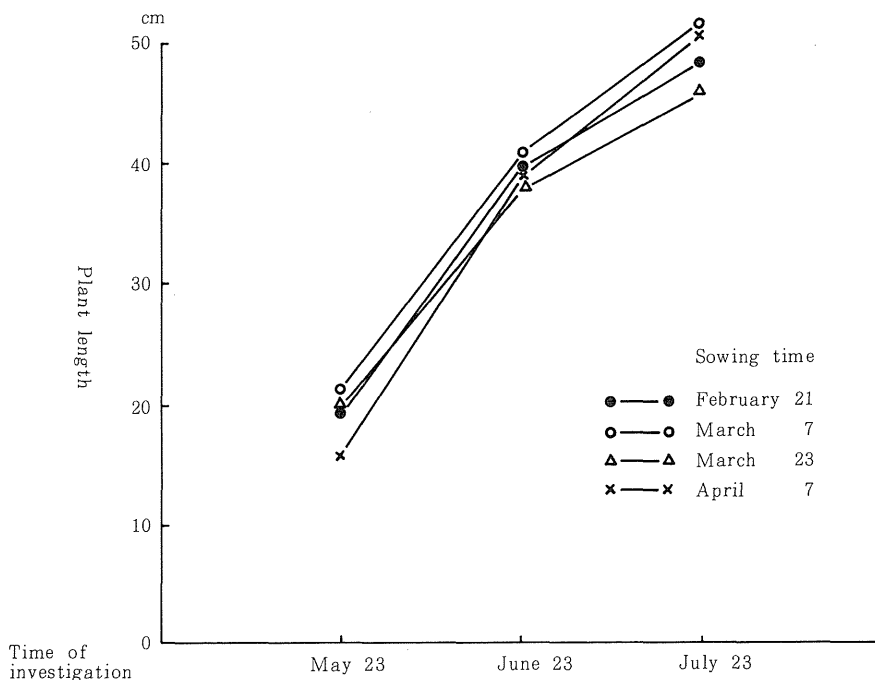


Fig. 3 Transition of plant length of each sowing time (Test III)

は3月7日は種区が調査期間を通じて最もすぐれた。4月7日は種区は5月23日に他区に比べてやや劣ったが6月23日には他区に追い付き、大差なくなった。

葉数も草たけとほぼ同様の傾向であった。7月23日にはいずれの区も葉枯れが多くなり葉数は減少した。

Fig. 4には種期別の生体重の推移を示した。5月23日の時点では3月7日は種区が2月21日は種区よりすぐ

れたが、そのほかはは種の早い順に生体重が大となった。6月23日には2月21日、3月7日は種区とも約10gとなり、3月23日、4月7日は種区に比べすぐれた。7月23日には2月21日は種区の生体重が著しく低下し、4月7日は種区と同程度となった。

葉しょう下部の太さは6月23日にはは種の早い区がすぐれた。7月23日には3月7日は種区が最も大とな

り、他区はほぼ同程度であった。

られ、3月7日は種区でやや多かった。

7月23日に2月21日は種区以外の区で分けつが認め

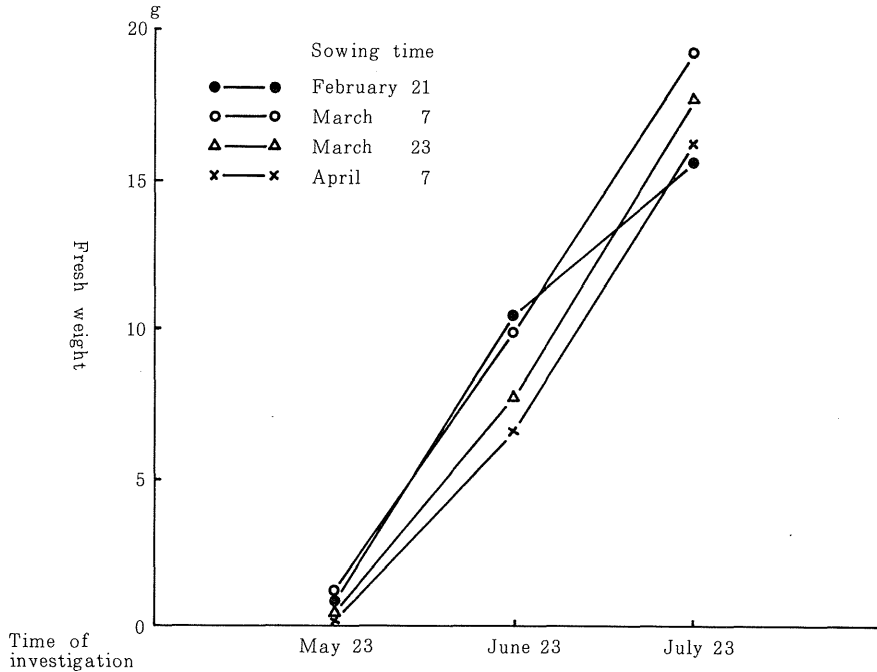


Fig. 4 Transition of fresh weight of each sowing time (Test III)

考 察

1 品種について

大鹿氏⁶⁾は次のように述べている。‘九条太’は別名‘黒だね’ともいう。京都の原産で1000年以上の古い歴史をもっている。冬季に休眠せず生長を続ける。葉肉薄く、軟らかく、品質の良い葉ネギの代表品種である。3~4本に分けつし、軟化を行うこともできる。‘九条細’は別名‘浅黄’ともいう。分けつが早く7~8本になる。葉しょう部は‘九条太’よりやや細く短い。葉身の色はやや淡色で、品質は良いが耐寒性弱く収量が少ない。‘岩槻’は埼玉県の原産で江戸時代岩槻市場から輸送されたので、この名があるといわれている。‘千住ネギ’と‘葉ネギ’の中間のもので、草たけがやや低く、

5~6本から10本くらいに分けつし、葉しょう短く、基部はふくれ、太さは中くらいである。葉身はやや細く、濃緑色で質は軟らかく、葉身、葉しょうとも利用される。夏の葉ネギであるが、関東地方での栽培は著しく減少している。増井氏³⁾によると‘奴’は堺市において古くから栽培されており、‘九条’に比べると分けつ数は多いが、草たけが短く、収量がやや少ないという。

上記のような各品種の特性は本試験でもほぼ確認された。‘九条細’は5月23日時点で最も生育がすぐれた。北関東の露地で早期より栽培する場合、本品種を用いるのがよいと思われる。6月23日の時点では各品種間差は小さかったが、‘奴’が最もすぐれており、この時期の収穫を目指すならば‘奴’を用いるのが良いと考える。実際近年は‘九条太’より‘九条細’が多く用いられており、大阪では夏どりに‘奴’を栽培することが多いと

いう⁴⁾。‘岩槻’は参考までにいれた品種であるが、7月23日の調査では良い生育を示した。これが夏ネギとしての本品種の特性であろう。

2 は種期について

秋谷・藤枝氏¹⁾によると関東における葉ネギ栽培では‘岩槻’を用い、3～4月には種し、6～10月に収穫するとしている。坂入氏⁵⁾によると小田原地方の直まき栽培では、12月上旬～3月中旬まきの場合トンネル栽培とし、露地栽培では3月下旬、5月下旬～6月上旬、又は10月中旬は種としている。別所氏⁴⁾によると大阪府下では葉ネギの周年栽培が行われており多くの作型があるが、大半は移植式である。直まき式には2、3の作型があり、10月上旬、1月中旬又は2月中旬がは種期となっている。

大阪の秋～冬まき栽培、小田原の秋まき栽培は幼植物の状態越冬させるのであるが、これは冬期かなり温暖なために可能なことと考える。冬の寒さが厳しく特に霜柱が著しい北関東では成立し得ない作型である。

本試験の結果から、当地方における春の露地直まき栽培では、3月上～中旬が最適は種期と考える。3月下旬～4月上旬は前者よりやや劣り、5～6月は種では更に生育が劣る。しかしこれらは種期でも実用栽培は十分可能であろう。また2月下旬のは種はやや早過ぎて初期生育が悪く、7月にはいって気温が上ってからの生育の衰えも早い、やはり実用栽培は可能であろう。もし保温施設としてトンネル又はハウスを利用すれば、生育状況は異なり、作期の幅が広がるものと思う。

本試験を通じて全般にさび病の発生が多かった。これは葉ネギの特性で、葉肉が軟らかいためと思われる。雨よけの意味でトンネル又はハウスを利用すれば、さび病の発生もかなり防げるものとする。

要 約

- 1) 北関東における葉ネギの春の露地直まき栽培において、適品種の検討と、2～6月の間の好適は種期の検討を行った。
- 2) 品種試験では‘九条太’、‘九条細’、‘奴’、‘岩槻’の4品種を用い、3月23日には種した。品種間に大きな生育差はなかったが、早期の5月23日には‘九条細’、中期の6月23日には‘奴’、そして後期の7月23日には‘岩槻’がそれぞれ良い生育を示した。
- 3) ‘九条細’を用いて3～6月間のは種期の検討を行った。3月15日は種区が最も良い生育を示し、4月15日は種区がこれに次いですぐれた。5月15日、6月15日とは種期が遅れるほど生育は劣った。
- 4) ‘九条細’を用いて、2月下旬～4月上旬間の早期のは種期の検討を行った。3月7日は種区が最も順調な生育を示した。2月21日は種区は初期生育がやや劣り、生育の衰えも早かった。3月23日、4月7日は種区は3月7日区に比べやや生育が劣った。

文 献

- 1) 秋谷良三編著：蔬菜園芸ハンドブック，p.502～503 (1968) 養賢堂
- 2) 熊沢三郎：蔬菜園芸各論，p.325 (1963) 養賢堂
- 3) 増井貞雄：農業技術大系，野菜編8，p.基273～278 (1973) 農山漁村文化協会
- 4) 農耕と園芸編：葉根菜の品種と栽培，p.238～239 (1969) 誠文堂新光社
- 5) 坂入平吉：農耕と園芸，36(7)，180～181(1981)
- 6) 清水 茂監修：野菜園芸大辞典，p.1387～1398 (1977) 養賢堂

Growth of Welsh Onion, (*Allium fistulosum* L.) Varieties of Ha-negi, Sowed at Several Times in Spring in Northern Kanto District

TERUO MATSUDA · MASATOSHI IZAKI · KATSUICHI KIKUCHI

1 Better varieties of Ha-negi and more suitable times of sowing during February to June were researched in these cultivation experiment of direct sowing.

2 Four varieties, 'Kujo-futo', 'Kujo-hoso', 'Yacko' and 'Iwatsuki', were sowed at March 23. Difference of growth among varieties was not so large. 'Kujo-hoso' at May 23, 'Yacko' at June 23 and 'Iwatsuki' at July 23 showed better growth at each investigation time(Table 1).

3 Suitable sowing times during March to June were researched with 'Kujo-hoso'. Plants sowed at March 15 were grown best and ones sowed at April 15 followed them. Growth of plants sowed at May 15 and June 15 was a little worse(Fig. 1, 2).

4 More suitable sowing times during late in February to early in April were researched with 'Kujo-hoso'. Plants sowed at March 7 were grown best. Ones sowed at February 21 were a little weakly grown in early time and lost vigor on and after July. Ones sowed at March 23 and April 7 were not so grown as ones sowed at March 7 (Fig. 3, 4).

(Sci. Rep. Fac. Agr. Ibaraki Univ., No.31, 25 ~ 31, 1983)